

「今につながる日本史」

丸山淳一著：中央公論新社

「恐るべしハヤリカゼのバイキン!」、「マスクをかけぬ命知らず!」これらは、大正時代にスペイン・インフルエンザが流行した時に日本でもマスクの着用を呼びかけた当時のポスター標語である。

今回のコロナウイルスの流行をWHOはパンデミック（世界的大流行）と位置付けた。パンデミックは過去に何度も起こり、人類はそのたびに危機を乗り越えてきた。100年前のインフルエンザは日本でも大正7年から3年間大流行し、国民のほぼ二人に一人が感染し、死者は45万人に達した。この流行は大正9年の春以降自然に収まった。ウイルスが全国津々浦々まで広がって、人々が免疫を獲得すれば、パンデミックは必ず終わる。この時の経験から学ぶべき教訓を著者は様々な視点から指摘する。

本書は、BS日テレで「深層NEWS」のキャスターを務めた読売新聞編集委員の著者が「読売新聞オンライン」に連載中のコラムをまとめたもの。

今起きている事件と、過去に同じような話はなかったのだろうか。例えば「公文書の書き換えは江戸時代にもあった」、「猛暑、豪雨、台風に怯えたあの時代」（源氏物語の頃）、など今起きている事件と昔の事件を比較したコラムは知的好奇心に働きかける。

過去に事件が起きた時に人は何を考え、どう動いたかを知れば、今起きている事件にもさまざまな角度から切り込めるのではないだろうかというスタンスは、ニュースを報道する立場だけでなく政策を立案する方たちにも役にたつ。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とはドイツの宰相ビスマルクの言葉だが、歴史について学ぶ意義を著者に語る出口治明氏への巻末インタビュー記事だけでも十分に面白い。今は歴史関係の新書がベストセラーになるなどちょっとした歴史ブームだが、過去の経験を今に重ね合わせて役立てようとする本書は、歴史に興味を持つ方々にお勧めの好書である。

(シニアネットワーク連絡会 齋藤 隆)

エネルギーレビュー誌の書評欄 2020年9月号掲載